

がん治療期とがんサバイバーを支えるオピオイド治療

Opioid treatment for pain in cancer patients with long-term prognosis and cancer survivors

*住谷 昌彦¹

*MASAHIKO SUMITANI¹

1. 東京大学医学部附属病院緩和ケア診療部

1. Deaprtment of Pain and Palliative Medicine, The University of Tokyo Hospital

がん治療の進歩に伴い、がん患者の生存期間は増進している。これに伴い、がん患者の治療期間も延伸し、さらに、がんが寛解したがんサバイバーも増加している。厚生労働省と本学会は「がんと診断された時から緩和ケア」というキャッチフレーズとともに緩和ケア・支持療法の極早期からの提供機会の充実を図っており、がん医療の進歩に併せて緩和ケアに期待される診療対象とその内容は変容してきている。

これまで主に進行がん、がん終末期患者に対するオピオイド鎮痛薬の普及にWHO式3段階鎮痛ラダーが果たした役割は疑いの余地はない。しかし、オピオイド鎮痛薬の上限を設けることなく使用し、疼痛増強時に積極的に頓用するという治療戦略は長期的なオピオイド鎮痛薬の使用を想定した場合には必ずしも正しいとは言えない。実際、アメリカでは疼痛患者が医師から処方されたオピオイド鎮痛薬に対して精神依存をきたす症例数は年々増加しており、“痛みがあればオピオイド鎮痛薬に対する精神依存や乱用は形成されない”とする考えが崩壊しつつある。

本発表では、がん治療期と寛解患者を主な治療対象に設定し、これらに対して安易にオピオイド鎮痛薬の処方を敬遠するのではなく、いかにメリハリを付けた処方をするかと我々が行っている集学的がん支持療法・緩和ケアの実践について概説する。

According to advancement of cancer treatment, cancer treatment periods have become longer and survival rates of cancer patients have improved profoundly. And, cancer survivors become increasing. Our ministry of health, labour and welfare recently proposes “supportive and palliative care for all of cancer patients when diagnosing malignant diseases”. In this lecture, risk and benefits of opioid treatment for pain in cancer patients with long-term prognosis and cancer survivors will be discussed. There are yet certainly few evidence for this discussion; however, protecting patients from opioid adverse effects is the universal rule for us, healthcare professionals.